

徳とせず、寧ろ男子に對する一種の威嚇物とし、男子また婦人に對うて貞操を要求する權威なく、たゞ哀訴歎願して貞操の他に向はざらむことを乞ひ、わつかに貞操の保たれつゝあるを以て満足せり、

結局、婦人は他と姦通せざるを以て立派なる貞操の證據とし、これを偉大なる恩惠的として男子に對ひ、男子は自己一人に許すを以て貞操の極度とし、これを有難く無上の名譽として婦人に對ふ、もし互角の相撲とすれば、今日の貞操問題に於て婦人は勝てり男子は負けたり、

以上これ以外の男女間に貞操問題は、全然これ不用なり、始めより問題とならず、終りは猶更ら問題とならず、その中間は互の愛と愛とを以て貞操問題を消滅す、

我國の一大文章

そもく我日本帝國として、建國以來の萬世に互るべき一大文章といふべきものを左に掲ぐ、數千年の古、神武天皇以前、既に世界的帝國として今日あるを暗示されたり、

伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇大御神の見霧し坐す四方の國は、天の壁立つ極み、國の退き立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜り坐向伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の艫の至り留る極み、大海原に舟滿ちつゞけて、陸より往く道は荷の緒縛ひ堅めて、盤根木根履みさくみて、馬の爪の至り留る限り、長道間なく立ちつゞけて、狭き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は八十綱うち掛けて引き寄することの如く、皇大御神の寄さしまつらば、荷前は、皇大御神の大前に、横山の如く打ち積み

置きて、残をば平けく聞しめさむ、また皇御孫命の御世を、手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸はへ奉るが故に、皇吾陸神漏伎神漏彌命と、宇事物頸根衝き抜きて、皇御孫命の宇豆の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。

世界いづれの國か、數千年の建國當時、既に克く斯の如き一大豫言の一大文章を存するものあらむや、

萬世一系の帝國主義は皇謨この時に定まり、天の壁立つ極み國の退き立つ限りは、世界の列國を友として人類平和の根本義を示され、加之も青海原は棹柁干さず舟の艦の至り留る極みは、正に我海國思想の本分を示され、荷の緒縛ひ堅めて馬の爪の至り留る限り狭き國は廣く峻しき國は平けく、國防と貿易の兩方面を示され、遠き國は八十綱うち掛けて引き寄することの如く、近きを撫で遠きを化して國威の發揚を示されしは、實に平和的四海統

一の便命この國にあるべき大豫言を遺されたり、海軍、陸軍、貿易、國威、その磐根本根履みさくみてとは、ふしぎに今日の山嶽を穿てる交通機關に當り、皇大御神の大前に、横山の如く打ち積み置きて、残をば平けく聞しめさむとは、國家經濟の政道に當る、茂し御世に幸はへ奉るとは、この國家ますく隆盛を期すべきものと暗示されたり、世界各國いづれも建國に關する神話的の傳説あれど、建國の基礎に於ける廣大無邊の遺訓として、歴史以前、言靈の時代、既に斯る一大暗示と斯る一大豫言とを有するものは、實に我祖神の賜物あるのみ、これを單に文章とするも、その雄大にして莊嚴なる、その高潔にして權威ある、加之も建國氣魄の天地に溢れて世界を狭しとせる勢ひ、遠き國は八十綱うち掛けて引き寄することの如くに至りては、正に我帝國の萬世を貫ける一大文章といふべし、

いろは俗諺

俗諺、俗諺、これを取るに足らずとせるは、いはゆる文字上の寄生蟲にして、天に口なく人をして言はしむるもの、もし社會自然の共鳴とすれば、この俗諺と俗諺とに寧ろ大なる意味ありといふべし、

學者の本分は自己に得たる多年の學力智識を以て、世人の難しとせる問題を平易に解釋すべき筈なれど、滔々たる今日の學者は自己の學力智識を廣告せむがため、平易なる問題を殊更ら難解に取扱うて、わざ／＼世人を迷路に引き摺り込むが如き癖あり、古今これを學者の學者臭きといふ、味噌の味噌臭きは忍ぶべきも、鼻持のならざる學者の學者臭きは實に忍ぶべからず、

或書に、いろはの俗諺を集めたるものあり、二十餘年前、我これを見て頗る愉快に感ぜしが、二十餘年後の今日、猶この愉快を減ぜざるのみならず、寧ろ痛快に露骨に粉飾せざる一種直覺的の人生訓として、ます／＼深き俗諺の趣味と權威とに服せり、

知る人は知るべきも、試みに掲げて、さらに新なる今日の思想上に照らし、また今日の社會上に變化應用せられむ事を祈る、乞ふ見よ、學者の著せる百卷の書にして、この俗諺一句に及ばざるもの頗る多きを、

(5)

- 石に立つ矢
- 一文吝しみの百知らず
- 一升榭は一升
- 命あつての物種
- 一寸の蟲にも五分の魂
- 命の洗濯
- 一身より味方なし
- 一寸伸ぶれば尋伸ぶる
- 石龜の地踏躡

放言録—いろは俗諺

- 石に釘
- 石の上にも三年
- 痛し痒しの瘡頭
- いたくない腹を探られる
- 急がば廻れ
- 醫者の不養生
- 家の三代目
- 生馬の目を抜く
- 家柄より食ひ柄
- 鯛の頭も信心がら
- 烏賊の甲より年の功
- 犬も歩けば棒に當る
- 犬になるとも大家の犬になれ
- 犬の糞で敵を取る
- 犬骨折ツて鷹に取られる
- 犬の川端
- 犬も朋輩も朋輩
- 煎豆に花が咲く
- いふ目が出る
- 色氣より食氣
- 色は思案の外
- いやく三杯目
- 色の白いは七難かくす
- いざり三百
- いつも柳の下に鱒は居ない
- 飯粒で鯛を釣る
- 幽霊の濱風
- いぐちに笑窪
- 賤しいものゝ系圖調べ
- 芋の煮えたも御存知ないか

(ろ)

- 論語讀みの論語知らず
- 論より證據
- 論に勝ツても業で負ける
- ろくな事いはぬ奴は理窟が巧い
- 論じて倒れる

(は)

- 八卦八段うそ九段
- 花は櫻木人は武士
- 花より團子
- 花の下に日が照る
- 鼻毛を讀まれる
- 鼻の下が長い
- 旗色を見て靡く
- 鳩にも三枝の禮
- 腫物に觸る
- 恥の上塗り
- 針の穴から天を覗く
- 針ほどの事を棒
- 灰吹から大蛇
- 走り馬に鞭
- 早かん
- べい悪かんべい
- はき溜へ鶴が降りる
- 初もの七十五日
- 腹に針
- 裸百貫
- 箬にも棒にもかゝらぬ
- 繫特の愚癡も文珠の智慧
- 馬
- 鹿が鐵砲打つ
- 馬鹿ほど怖いものはない
- 花に嵐
- 馬鹿と鉄は使

放言録—いろは俗諺

ひやう

(に)

- 二枚舌
- 二の足を踏む
- 二足の草鞋は穿けぬ
- 人を見て法を説く
- 煮ても焼いても食へぬ奴
- 人が我入
- にが手に向ふ
- 錦を著た乞食
- 逃した魚は大きい
- 似たもの夫婦
- にくまれ子は世に憚る
- 人參呑んで首くゝる
- 二階から目薬
- 二度ある事は三度ある

(ほ)

- 佛作ツて魂入れず
- 佛の顔も三度
- 佛も方便
- 骨折損の草臥儲け
- 牡丹餅で頬を叩かれる
- 盆と正月が一度に來た
- 凡夫盛に神

崇なし

○ほしや惜しや

○ぼろ買の家潰し

(へ)

- 下手の考へ休むに似たり
- 下手の横好き
- 下手の長談義
- 臍が
- 西國する
- 臍が茶をわかす
- 尻を放ツて尻をすぼめる
- 瓢箪から駒
- 瓢箪に鯰

(と)

- 遠くの親類近くの他人
- 豆腐に鏡
- 遠ざかるもの日々に疎し
- と
- かく近處に事なかれ
- ところ變れば品かはる
- 燈臺下暗し
- 飛ん
- で火に入る夏の蟲
- 鳶が鷹を生む
- 鳥なき里の蝙蝠
- 虎嘯けば風が鳴る
- 問ふに落ちず語るに落ちる
- 取らぬは狸の皮算用
- 年寄

放言録—いろは俗諺

の冷水 ひやみづ ○泥の中の蓮 どろの中のはす ○泥棒に追銭 どろぼうにおひせん ○毒にも薬にもならぬ どくにもくすりにもならぬ ○毒を食はゞ皿まで どくをくらはゞさらまで ○十の神童二十歳の凡夫 しんどうはたち二十歳のほんぶ ○隣家の苦菜 となりのにがな ○毒

(ち)

○血で血を洗ふ ちでちをあら ○沈香も炷かず屁も放らず ちんかうもたかずへいもはら ○塵積ツて山となる ちりつも ○ちぎれても錦 ちぎれてもにしき ○小さくとも針は飲めぬ ちひさくともはり ○長者二代なし ちやうじやた ○長者の萬燈 ちやうじやまんとう ○貧者の一燈 ひんしやのとう ○地獄の沙汰も金次第 ぢごくのさたもかねしだい ○地獄で佛 ぢごくでほとけ ○地震雷火事親爺 ぢしんかみらいくわじおやぢ ○重箱の隅を楊枝でせゝる ぢゆうはこすみをやうじでせゝる ○女郎買の糠味噌汁 ぢやうらうかひぬかみそじ ○仲裁は時の氏神 ちゆうさいはときうぢがみ ○提燈に釣鐘 ちやうちんつりがね

(り)

○理を非に枉げる りをひにま ○埋に勝ツて非に負ける りにかしてひにま ○理もかうすれば非の一倍 りもかうすればひのはい

○良薬は口に苦し りやくはくにく ○律義ものゝ子澤山 りちぎものゝこたくさん ○兩手に花 りやうて ○理窟屋の義理 りくつやぎり 知らず

(ぬ)

○盗人を捕へて繩を糾ふ ぬすびとをとらへてなはをな ○盗人を捕へて見れば我子なり ぬすびとをとらへてみればわがこ ○盗人の晝寝に當がある ぬすびとにあて ○糠に釘 ぬかにくぎ ○盗人の暇はあれど守人の暇はない ぬすびとひまはあれどまもりてひまはない ○盗人に鍵 ○ぬれ手で粟 ぬれてあは ○抜かぬ太刀の功名 ぬかぬたちこうみやう ○濡れぬ先こそ露をも厭へ ぬれぬさきこそつゆをもいと

(る)

○類を以て集る るゐをもちあつ ○類は友 るゐはとも ○琉璃の板よりも俎板 るゐのいたよりもなないた ○琉璃も玻璃も照らせば光る るゐもはりもあつてひかる

(を)

- 女さかしくて牛を賣り損ふ
- 女は三界に家なし
- 女やもめに花が咲き男やもめに蛆が湧く
- 女氏なくて玉の輿
- 女やもめに花が咲き男やもめに蛆が湧く
- 終り初
- 小田原評議
- 岡目八目
- 尾に鰭つける
- 穩田百姓作
- 奢る平家は久しからず
- り取り

(わ)

- 笑ふ門には福來る
- 笑ふ門には福來る
- 渡りに船
- 破れ鍋にとぢ蓋
- 綿に針を包む
- 禍も三年たてば福となる
- 禍は下から起る
- 我身を爪つて人の痛さを
- 我身を食ふともがに食ふな
- 我身を食ふともがに食ふな
- 我佛尊し
- 和歌に師匠なし
- 渡る世間に鬼はない

(か)

- 金が敵
- 金は湧き物
- 勘定合うて錢足らず
- 蛙の子は蛙になる
- 蛙の面に水
- 蟹の横這ひ
- 蟹を食ふともがに食ふな
- 蟹は甲羅
- 似せて穴を掘る
- 借る時の地藏顔
- 借著するより洗ひ著
- 借り
- 八合すます一升
- 影辨慶
- 川だちは川で果てる
- 壁に耳あり
- 枯木に花
- 癩病の瘡羨み
- 癩病に棒打ち
- 神は高運の凡夫を救ふ
- 可愛い子には旅させろ
- 可愛さ餘ツて憎さが百倍
- 勝ツて兜の緒を占
- かせぐに追ひ付く貧乏なし
- 看板に偽なし
- 枯木も山の賑
- 飼犬に手を噛まれる
- 歌人は居ながら名所を知る
- 郷に入ツ
- 痒いところへ手が届く
- 學者必ず間ぬけ面
- 風邪
- ては郷に従へ
- 痒いところへ手が届く
- 學者必ず間ぬけ面
- 風邪

は百病びやうの基もと

○變り易やすきは人心ひとこころ

○鐵槌かまづちの川流かはながれ

○片口かたくち聞いて利りを付つ

けるな

○孝行かうかうのしたい時じ分に親おやはなし

(よ)

○夜道よみちに日は暮くれぬ

○嫁よめが姑しゅうごめになる

○夜目よめ遠目とほめ笠かさの内うち

○葦よしの髓ずるか

○天てんを見る

○弱よわり目めに祟たり目め

○よみと歌うた

○用ように叶かへば寶たからなり

○横よこに車くるまを押おす

○横槍よこやりを入いれる

○よせば善よい智ち慧ゑ

○よすに止よされぬ病やまひ

(た)

○玉たまの疵きず

○立たて板いたに水みづ

○短氣たんきは損氣そんき

○高見たかみで見物けんぶつ

○立寄たちよらば

○大樹おほきの下もと

○立たつ鳥とりあとを濁にごさず

○鷹たかは飢うゑても穂ほをつまず

○旅たびは

道みちづれ世よはなさけ

○蓼食たでくふ蟲むしもすきく

○疊たみの上うへの水練すゐれん

○倒たふれて

もたど起おきね

○寶たからの持もち腐ぐされ

○尊たふとい寺てらは門もんから知しれる

○溜たまるほど

汚きたいのは金持かねもちと灰吹はひふき

○他た人じんの空背そらに

○棚たなから牡丹餅ぼたんもち

○螻蛄たうごの斧き

○多勢たぜいに無勢むぜい

(れ)

○禮義れいぎより實義じつぎ

○禮れいは入いらぬと禮れいを取とる

○歴れきと

○連木れんぎで腹はらを切きる

○禮れいは入いらぬと禮れいを取とる

○歴れきと

(そ)

○損そんして徳とくを取とれ

○惣領そうりやうの順録じゆんろく

○袖そでふりあふも他生たしやうの縁えん

○底そこもあ

○れば蓋ふたもある

○底そこに底そこあり

放言録ほうげんろく—いろは俗諺

(つ)

- 月夜に提燈
- 月夜に釜をぬかる
- 月に鼈
- 月にむら雲
- 聾
- 空耳と早耳
- 爪で火を點す
- 爪で拾うて箕でこぼす
- 槌で庭掃
- 鶴の一聲
- 角を矯めて牛を殺す
- 杖の下を廻る子は打てぬ
- 面の皮の千枚張
- 釣合はぬは不縁の基
- 月夜ばかりはないぞ

(ね)

- 猫に小判
- 猫に鯉節
- 猫をかぶる奴
- 猫に天蓼
- 寝耳に
- 寝る子は育つ
- 願ツたり叶ツたり
- 念には念を入れよ

(な)

- 泣面に蜂
- なす時の閻魔顔
- 啼く兒と地頭には勝たれぬ
- ない

- 袖は振れぬ
- ないが意見の總仕舞
- 七顛び八起き
- 七重の腰を八

- 重に折る
- 七たび尋ねて人を疑へ
- なくて七くせ有ツて四十八癖

- 長いものには巻かれる
- 長居は恐れ
- 習ふより慣れる
- 夏の蟲

- 氷を笑ふ
- 生酔ひ本性違はず
- 生兵法は大疵の基
- 名を取るよ

- り徳を取れ
- ながれ川で尻を洗ふ
- 難多羅法師が柿の核
- 啼かぬ

- 猫は鼠を捕る
- ならぬ勘忍するが勘忍
- 仲人口に油断すな
- 梨も

磔もなし

(ら)

- 來年の事をいへば鬼が笑ふ
- 樂は苦の基苦は樂の基
- 樂あれば苦あり

- らりこツぱい
- 羅漢の洒落

放言録—いろは俗諺

(む)

- 六日の菖蒲十日の菊
- 向ふ三軒兩隣家
- 無理が通れば道理が引ッ込む
- 向ふ河岸の火事
- 昔とツた杵柄
- 無藝大食
- 昔を語る今の馬鹿
- 無鐵砲の釣瓶打ち
- 向ふ見ずは世間見ず
- 向ふものは避けて打て

(う)

- 馬の耳に風
- 馬の耳に念佛
- 馬よりは鞍
- 馬には乗ツて見よ人
- 馬の耳に風
- 牛は牛づれ
- 牛を馬に乗り換へる
- 牛に曳かれ
- 善光寺まわり
- うどの大木
- 氏より育ち
- 瓜の蔓に茄子は生らぬ
- 嘘から出た誠
- 嘘八百
- 噂をすれば影
- 上見ぬ鶯
- 賣言葉に買言葉
- 運は天にあり牡丹餅は棚にあり
- 打てば響く

(ろ)

- 鶉の眞似する鴉
- 嘘も方便
- 居なりに氣なり
- 井の中の蛙大海知らず
- 居る處凹む
- 田舎の
- 學問より京の晝寢

(の)

- 咽喉元すぎて暑さ忘れる
- 能書筆を選ばず
- 鑿といへば槌
- のりかけた舟
- 能ある鷹は爪を隠す
- 蚤の
- のりかけた舟
- 能ある鷹は爪を隠す
- 蚤の

(お)

- 鬼に金棒
- 鬼の念佛
- 鬼の霍亂
- 鬼の目に涙
- 鬼も十八

放言録—いろは俗諺

- 番茶も出花
- 鬼の留守に洗濯
- 親の光りは七光り
- 親の心子知らず
- 親の因果が子に報ふ
- 親は苦をする子は樂をする孫は河原で乞食する
- 親の面へ泥を塗る
- 親はなくとも子は育つ
- 親なき後は兄弟
- 親の首へ繩をかける
- 負うた子に淺瀬を教へられる
- 老いては子に従へ
- 大取より小取
- 己れの田へ水を引く
- 帯には短し襷には長し
- 重荷に小づけ
- 思ひ立つ日が吉日
- おんば日傘
- お山の大将
- おのが頭の蠅を追へ
- 狼に衣
- お手前味噌は鹽辛い
- 恐ろしいもの白粉と紅

(く)

- 口は調法
- 口は禍の門舌は禍の根
- 口も八丁手も八丁
- 果報は

- 寢て待て
- 藥九層倍
- 藥人を殺さず醫者人を殺す
- くはず嫌ひ
- 腐ツても鯛
- くさいものに蓋
- 暗闇から牛を引き出す
- 苦しい
- 時の神だのみ
- 愚者の一得
- 暗闇の恥を明るみへ出す
- 食はず貧樂

(や)

- 病なほりて醫者を忘る
- 闇に鐵砲
- 闇に礮
- 闇雲飛乗
- 藪から棒
- 藪を突いて蛇を出す
- 安からう悪からう
- 安もの買の錢
- 失ひ
- 山に千年海に千年
- 山師の玄關
- 焼木杭に火がつき易い
- 焼野のきぐす夜の鶴
- 焼石に水
- 瘠馬に重荷
- 槍持槍を使はず
- 柳の枝に雪折なし

放言録―いろは俗諺

(ま)

- 蒔かぬ種は生えぬ
- 待てば海路の日和
- 萬能達して一心足らず
- 待つ身より待たるゝ身
- 馬子にも衣裳
- 負けるが勝ち
- 丸い卵
- 子も切りやうで四角

(け)

- 喧嘩兩成敗
- 喧嘩の後の棒ちぎり
- 喧嘩の側杖
- 毛を吹いて疵
- を求める
- 桂馬の高あがり歩の餌食
- けふは人の身あすは我身
- 下
- 司の智慧は後から出る
- 藝が身を助ける不仕合せ
- 藝は道に依つて賢し
- けんもほろゝの挨拶
- 傾城の空涙

(ふ)

- 古川に水絶えず
- 夫婦喧嘩は犬も食はぬ
- 不孝な子ほど可愛い
- 河豚は食ひたし命は惜し
- 古家の造作あとで後悔
- 武士は食はねど高
- 楊枝
- 富士の山を蟻がせゝる
- 豚を抱いて臭きを忘る
- 文はやり
- たし書く手は持たず

(こ)

- 後悔先に立たず
- 子を持つて知る親の恩
- 言葉多きは品少し
- 子
- を棄てる藪はあれど身を棄てる藪はない
- 子は三界の首枷
- 子ゆゑの闇
- 路
- 小娘と小袋に油断すな
- 顛ばぬ先と杖
- 故郷へ錦
- 紺
- 屋の白袴
- 紺屋の明後日
- 弘法にも筆のあやまり
- 凝つては思案
- に能はず
- 粉糠三合あれば養子に行くな
- こけの一心
- 田作の齒

ぎしり ○怖いもの見たさ ○後生より今生が大事

(え)

○鍛で鯛釣る ○縁の下の力持 ○縁は異なもの ○追風に帆をあげる

○榮耀に餅の皮 ○柄のないところへ柄を添へる ○閻魔が鹽から

(て)

○天下まはり持 ○天道人を殺さず ○亭主の好きな赤烏帽子 ○出る

杭は打たれる ○手前味噌は御馳走にならぬ

(あ)

○あとの祭り ○朝起は三文の徳 ○暑さ寒さも彼岸まで ○麻の中の

蓬 ○案ずるより生むが易い ○あちら立てれば此方が立たず兩方立てれば

身が立たぬ ○秋茄子は嫁に食はすな ○逢ふは別れの始め ○悪銭身

に付かず ○阿彌陀の光りも金次第 ○悪事千里 ○悪女の深情

○頭かくして尻かくさず ○飴を舐らせる ○油をかける ○當ツて碎

ける ○蟻の思ひも天へ届く ○あて事と越中禪は向ふから外れる ○虻

蜂取らず ○雨降ツて地固まる ○後の雁が先になる ○赤子の手をね

ぢる ○あいた口へ牡丹餅 ○合せもの離れもの ○ある奴ない顔をす

る

(さ)

○細工は流々仕上げを見る ○猿も木から落ちる ○三人寄れば文珠の智慧

○山椒は小粒でもヒリ、と辛い ○さはらぬ神に祟なし ○坐して食へば山

放言録—いろは俗語

も盡きる ○三十振袖四十島田 ○三年たてば三つになる ○三遍まは
ツて煙草にせう

(き)

○木に餅が生る ○木で鼻くゝる ○木に竹を繼ぐ ○木に棲む蟲その
木を枯らす ○金錢は親子も他人 ○雉子も啼かずば打たれまい ○狐
を馬に乗せる ○麒麟も老いては驚馬に劣る ○畢丸もつり方 ○疵持
つ足は笹原厭ふ ○氣が利いて間がぬける ○狂人に双物 ○著れば著
寒し ○器用貧乏人寶 ○義理と禪かゝしてならぬ ○聞くは一時の恥
聞かぬは一生の恥 ○聞いて極樂見て地獄

(ゆ)

○油斷大敵 ○湯の辭義は水になる ○夢に牡丹餅 ○ゆきがけの駄賃

(め)

○めくら蛇に怖ぢず ○盲の垣のぞき ○めくら千人の世の中 ○目の
よるところへ玉がよる ○目も口ほどに物をいふ ○目の上の瘤 ○め
ん鶏すゝめて牡鶏時をつくる ○飯の上の蠅 ○名人は人を誘らず

(み)

○實のなる木は花から知れる ○見るは法樂 ○見掛け倒し ○見ぬも
の清し ○身を棄てゝ浮ぶ瀬 ○身から出た錆 ○水の流れと人の行末
○水かけ論 ○三ツ兒の魂百までも ○三日坊主 ○身は身で通る
○身知らずの人詮議 ○三日見ぬ間の櫻

放言録—いろは俗諺

(し)

- 猪を食ツた報い
- 吝坊の柿の種
- 尻に帆かけて遁げる
- 商賣
- 忌み敵
- 朱に交れば赤くなる
- 尻の毛まで抜かれる
- 尻が割れる
- 釋迦に説法
- 知らぬが佛
- 知らぬ顔の半兵衛
- 知らざ半分値
- 尻くらひ観音
- 親は泣き寄り他人は食ひ寄り
- 死んだ兒の年かぞへ
- 鹿を追ふ獵師山を見ず
- 借金を質に置く
- 詩を作るより田を作れ
- 下地は好きなり御意はよし
- 證文の出し後れ
- 慈悲を垂れれば糞を垂れる
- 蛇の道は蛇が知る
- 正直の頭に神宿る
- 上手の手から水が漏る
- 蛇の道は蛇が知る
- 正直の頭に神宿る

(あ)

(ひ)

- 貧乏ひまなし
- 貧すりや鈍する
- 貧乏人の子澤山
- 貧の盗み
- 貧僧の重ね齋
- 飢しい時に無味いものなし
- 人は外見より心
- 人の振り見て我振り直せ
- 人は一代名は末代
- 人の口には戸が建てられぬ
- 人の疝氣を頭痛に病む
- 人を呪はゞ穴二つ
- 人を見たら盗賊と思へ
- 人は見かけによらぬもの
- 人の噂も七十五日
- 人の禪で相撲を取る
- 廂を貸して母屋を取られる
- ひくい處に水たまる
- 一口ものに頬を焼く
- 最員の引倒し
- 膝とも談合
- ひかれものゝ小唄
- 百日の説法も屁一つ
- 百貫のかたに編笠一かい
- 一人娘に婿八人

放言録ーいろは俗諺

(も)

○物種盗んでも人種は盗めぬ
○餅は餅屋

○元の木阿彌

○門前の小僧習はぬ經を讀む

(せ)

○船頭多くて舟山へ上る
○千日の萱を一夜で焼く

○急いては事を仕損じる
○雪隠で饅頭

○梅檀は二葉より
○背に腹は換へられぬ

(す)

○すてる神あれば助ける神あり
○野となれ山となれ

○好きこそ物の上手
○雀百まで踊り忘れぬ

○住めば都
○粹が身を食ふ
○捨鉢
○挿小木に羽が生えて飛ぶ

いろは四十八字の俗諺、もしこれを學者の學者臭きものたらしめば、
枝葉の議論百出、難解いよく難解を重ねて、殆ど萬卷の書となるべし、

明鏡

人間の最も難きは自己を知るの明にあり、自家妍醜自家知といへど、
實際に間違ひなく自己を知るものは殆ど稀にして、十中の八九、多くは自分の事を棚に上げて置いて餘所の穿鑿に耽るのみ、お手元拜見の一語、罵り得て妙を極む、
恐らく今日の社會、俯仰天地に愧ぢずして立派に我お手元を拜見せらるゝものは尠く、
いたるところ嫉妬偏執を以て他人の揚足を取るに汲々たり、まことに御苦勞千萬といはざるべからず、されど世間この御苦勞人の多きを奈何せむ、

もし自己を省みて自己を知るの明を難しとすれば、せめて自己の容貌を顧みて自己を知るべし、人間その容貌を照らすの道に鏡なるものあり、

朝夕その左右に鏡を置いて、これに對し、これに向ひ、以て自己の面を映すべし、明鏡は有形の反射器以外、その心を照らして人間の無形上に最も偉大なる自己反省の教訓を含む、鏡の語源はかんがみるより起れり、鏡に對して恥づかしきもの、豈それ醜女のみならむや、いかに横着なる奴も、いかに圖太い奴も、いかに厚顔無恥なる奴も、一室を閉ぢて周圍に人なく、四方たゞ聞として我のみ端坐黙々たる時、くもりなき明鏡に對し、いつはりなき我面貌を照らし、つらく、惟みて自惚心を去り、しみく、と眞正面より虚心平氣に打守れば、今更ら案外の粗末なる我面に驚くのみならず、その粗末なる我面以外に於て、必ずや何等かの疚しく恥づかしき點あるべし、

まづ第一その面を他人にあらざる我なりと意識し、この我なるもの、果して過去に何事をなせしか現在また何事をなしつゝあるかと、自問自答の上に脇目も觸らず我面を見詰め、此奴この面で内々あゝいふ事をせしかと思へば、きまり悪く面目なく、誰か多少の顔を赧めざるものありや、

ろくでもない面を鏡に對うて、我みづから我に愧ぢざるのみか、ますく自惚の増長する奴は、蓋し一種の誇大妄想を帯びたる色情狂なり、

たとひ人の前では鷺を鴉といふ奴も、四邊に人なき明鏡に對うて、ありく、と現はれたる我は我を欺くべからず、貴公でもなく足下でもなく汝でもなき我と我との對面上、竟には眞面目に久しく睨み合うて居れざるべく、人間は他人の包圍攻撃よりも自己の責道具に最も弱きものなり、

我を照らすといふ一事は、いかにも人間に偉大なる感化力を與へて、古來我國の神體を多く鏡とせるもの、印度その他の諸國より渡れる宗教的の偶像よりは頗る高尚に嚴格に徹底せる意味ありといふべし、

建國祖神の三寶器中に八咫の御鏡あり、萬葉以來文學上また眞寸鏡の語を失はざりしにこの鏡を只これ女の專有物として用ひ來れるは、たとひ一の粧飾品にせよ、今日の歐風を學べる家庭にも應接所にも大なる姿見あるに對して、甚だ遺憾なりといふべし、

彼等の祖先は水中に移れる我影を見て我以外に我ありとし、これを人間離魂の證據とせる蒙昧の民にあらずや、

我國の鏡を單に婦人の容色具とせるは、男子の蓬髮垢面を一種有力の誇りとせる戰國時代の遺風にして、そもく男子の鏡に對する、寧ろ婦人の容色を作るよりは自個修養の上に

於て最も高尚なる多大の意味を含む、これを簡單に日常の用とすれば、人の顔を見る前まづ自己の面を見ざるべからず、これを實際の處世上に取れば、久しく自己の面を見忘れたる奴、多くは世の中に向うても亦その方角を忘れたる恐れあり、

さらに鏡は人間長壽の一具たり、絶えず鏡に對ふもの、その容貌は壯年を久しきに維持して勢力また早く老衰せざるは事實の統計上、争ふべからざるものあり、

但し常に懷中鏡を放さず女の尻を追ひ廻るが如き今日の青年は、たゞ無用の焦慮り氣味に勢力を消耗して、寧ろ人よりも早く老衰するものと知るべし、念のため殊更に一言を加ふ、

坐談一束

今日の社會、法律の進歩と悪人の進歩と、その競争上に於ける最後の勝敗いづれに歸すべきや、動もすれば法律なるもの、善人の不用意を直に罰し得べきも、悪人の用意周到を容易に罰し得ざらむとす、蓋し法律の脚よりも悪人の脚は、常に一步お先へ御免蒙れるが如し、今日の貧乏神は稼ぐに追ひ抜き、今日の悪人は法律を追ひ越して、こゝまでお出でといふに似たり、

代議士に歳費を給するは可憐ら代議士を貧乏人の日傭取と一般に侮辱する所以なり、彼等は金錢に代へ難き名譽的の國士を以て自ら任じ、また他に其人なき社會公衆の代表者として推擧され、加之も恒心と恒産に遺憾なく充實せる筈のもの、これに僅二三千圓の端た金を與ふるが如き寧ろ無禮ならずや、その往復に彼等より汽車賃を拂はしめず國家より鐵道

の只乘を以て敬意を拂へば足れり、高利貸に歳費を取られ宿賃を踏み倒し待合を荒らすなどとは以ての外の嘘にして、友を賣り世を欺き政黨政派の離合集散も只これ利益問題の外なしとは専ら世間の噂に止り、衆議院内また聞くに堪へざる醜劣野卑の罵詈譎は彼等の口より出づるにあらず、悉く速記録の間違ひなり、乞ふ、選舉民は安んじて感謝せよ、

醫術の進歩せるため安心して不養生するものあり、藝術は神聖なるため安心して墮落するものあり、保證人の確實なるため安心して悪事を行ふものあり、慈善の美名あるため安心して不慈善の行爲をなすものあり、境遇位置の高きがため安心して下劣の醜事を恣にするものあり、その他いづれの階級に於ても今日の社會、うかく安心さすべからず、寧ろ危険状態にあらしむるを以て本人のためとす、安心すれば却つて無鐵砲に間違ひの恐れあ

り、昔は安心立命と稱し、今は安心縮命といふ、

勉強の二字、これを悪く強ふれば或意味に於て殆ど一種の人殺しなり、勉強せざれば一人前となり得ざるものに向うて無理に勉強を督促するは、その人間の精神上の苦痛に堪へざらしむる責道具となり、結局は竟に勉強の効果なきに終る、いかに勉強しても苦痛を感じず多々ますます平氣に勉強を続け得るもの、始めて勉強のため世間普通の群を壓して傑出すべし、學校の試験毎に睡眠不足のため顔色を失ひ體量を減するが如きものは、たとひ第一の優等を以て其學校を卒業するも、社會に出でて元氣消耗の結果、寧ろ案外に競争場裡の落伍者たること多し、勉強また人を選ばざるべからず、瘦馬に重荷を積んで、遠路の山阪これを鞭つが如きは愚の極なり、天下この愚を演ずるもの、天下この愚に苦しめらる

るもの、正に尠からざるべし、

もし今日の小説家に戀愛の二字を取り去らば、いかなる名作の産れ出づべきや、もし今日の新俳優なるものに海濱の背景と病院の一幕と華族の名稱と懺悔の場とを禁ずれば、いかなる舞臺面を演ずべきや、もし今日の女優に男性の後援を斷ち孔雀の如き粧飾を剝奪すれず、果して彼等いかなる藝術に生くべきや、

生活難は近來急造の残酷なる特種物にあらず、古く昔より貧苦に泣くものあり道路に斃死するものあり、加之も乞食は最も多し、いふ勿れ昔は物價安直にして人間の割合に職業また尠からずと、何ぞ自己の意氣地なしを告白するの甚だしきや、物價の安直は今日の貨幣率

に比較せる安直にして當時の安直にあらず、もし人口増加せりといへば文明の進歩と共に職業分類の増加せる寧ろ昔の割合に勝れり、生活難の一語、只これを叫ぶと叫ばざるにあるのみ、結局その聲の大に聞えざりしは新聞雑誌の如き民間悲鳴の共通機關なしかがためのみ、凶年飢饉に金を抱いて餓死するものありし昔に比すれば、一本の電報を以て海外より自由自在に食物の輸入せらるゝ今日、いかに幸福ならずや、物々交換の樂天時代さへ人は物々のため相應に働かざるべからず、まして生存競争の今日、人間生活の容易ならざるを今更ら氣が付いて、脚下より鳥の立つが如くに驚くは、あまりに後れたりといふべし、泣いても笑うても、來るだけの生活難は遠慮なく間斷なく會釋なく日夜に押し寄せ來る、これを巨萬の富なく特殊の手腕なくして、懐手のまゝ鼻唄まじりの安樂に凌がむとするもの、まづ夢にでも見る外なし、

○
今日の社會に於ける人間は、貧富、貴賤、苦樂、成敗、強弱、總ての一切ますゝ兩極端に分れて、雙方の距離いよゝゝ次第に遠く廣く隔絶し、あまり明白に片寄り過ぎし結果、その中間を保ちし境遇と位置とは殆ど將に消滅せむとす、危からずや、これを自動車と電車との間に於ける俾の漸く減じ來りしと一般に見るは、社會の政策上、聊か樂觀に過ぎたりといふべし、今日この中等人間の多きは汽車の二等客のみ、

○
もし身分不相應の美衣を纏ふもの、これを虚榮虚飾とすれば、殊更ら身分不相應の麤服を纏へるもの、またこれ一種の虚榮虚飾にして、世間萬人いづれの目よりも其境遇と其地位とに適當せる衣服は殆ど稀なり、簡單なる日常の衣服なほ斯の如し、傲慢に過ぐるもの、

謙遜に過ぐるもの、ますく人間その身の分を失ふもの多きは怪しむに足らず、

○
美食を罵るもの、わづかに咽喉三寸の美味といへど、咽喉三寸なるが故に寧ろ美味の價値あり、もし咽喉の長さを論ずれば、人間よりも鶴の頸は更に長く猪頸は最も短し、加之も美味は滋養を伴ひ身體強壯の肥料たるのみならず、酒は酒以外に種々の贅澤を招けども、たゞ單に美味を食するがため、身を亡し家を潰せしものは尠く、これを人間の快樂とすれば、頗る罪なくして差引勘定さらに損失なき心身兩用の快樂といふべし、わざく鹿食に甘んじて世間に誇るが如きもの、動もすれば社會の競争に外れたる偽君子の口吻より出づ、身體の營養を缺いて病氣に高價なる醫藥を用ふるもの、平生その美味に口腹を満たして大に活動するものと、人生打算上の利害得失それ孰れぞ、但し美味のために生活難を叫ぶ奴

は美味を食ふの資格なし、

○
我國民的の氣風を最も遺憾なく天真爛漫の現實に發揮せるもの、いはゆる土俵の上に於ける相撲の外なし、國と國とに交際善美の理想以外、一日も戰鬥力を缺くべからざる今日、人と人との愛情圓滿の理想以外、苟も生存競争を避くべからざる今日、勢ひ世界の進歩は勝劣によりて發展し人間の向上は強弱によりて發展す、詮じ來れば避け難き世界の大勢と免れ難き人間の現在を併せ得て、これを一場の赤裸々に決するもの、兩々の力士とに相對する角觥の外に求むべからず、加之も人生の最も不快を感すべき系統の弊害、階級の俗習、過去の閱歷、情實の關係、門閥の跳梁、金權の壓迫、權謀術數、嫉妬陰險、附和雷同、朋黨比周、その他あらゆる總ての依頼心より生じ來る一切の援助を去りて、自個の

力量以外、平生の技術以外、一場の勝敗以外、さらに何物の容嘴をも許さざる男兒の態度は、今日の人間界これを相撲の外に求むべからず、美術心を以て觀れば、一點加工の人為に施せる粧飾なく細工なく、筋肉の發達せる男性美は正に是れ天生ありのまゝの眞を曝け出せり、競争心を以て看れば、人生中の厭ふべきものを悉く排除して、最も正直に最も露骨に最も壯快に勝敗を決する模範的なり、加之も一たび土俵を下れば仇敵の如きもの互に手を取つて骨肉の如く談笑す、これを今日に於ける政黨政派の争ひと比較して、そもそもいかなる感ありや、日比谷原頭の衆議院と江東の國技館と對照して、そもくいづれに立派なる勝敗の眞意ありや、シルクハットに燕尾服の意氣揚々たる紳士も、或は布子一點寒曝しの取的に恥づるところなきや、

○

金を借りたものと金を貸したものと、雙方いづれに心配の多きや、恩を施せしものと恩を蒙りしものと、雙方いづれに記憶力の永久なるや、この二個の問題を遺憾なく遺漏なく最も明白に解答し得るものあれば、始めて今日の世間を談じ今日の人心を語るに足るべし、

○

世の中に怖ろしきもの、智慧のある馬鹿と精神病院に收容されざる半狂者にして、この二者は最も今日の社會に多し、馬鹿の智慧は馬鹿さ加減に念を入れて無用の片意地を張り見當違ひの屁理窟を並べ、精神病院に收容されざる半狂者は自他の關係を没却して一時の發作的より意外の嫉妬を起し案外の怨恨を含む、いづれも油斷大敵の危険物なれど、さらに最も危険なるは無教育の文盲よりも寧ろ多少の學問せし若き女の自暴自棄なり、世間これに關して遁れ難き男子窮迫の體を見れば、恥も外聞もなく押し掛けられ理も非もなく武者

振り付かれて生命からぐの憂目に逢へり、馬鹿と狂者と捨鉢の女これを世の三難といふ、
○
閑居して不善を爲すは小人の常といへど、近來の小人は閑居せずとも能く不善を行ひ、寧ろ寸暇なき繁忙中、どさくさ紛れに乗じて人目を眩まし、火事場盜賊の如き早業を演ずるに最も巧みなり、蓋し社會の趨勢に従うて小人の技倆また進歩せりと稱すべきか、

○
名あるもの實なく、實あるもの名なく、名實ともに併せ得るの妙きは、才ある女に美なく美ある女に才なく才色兩全を得るの難きと一般、富める國の兵は弱く、兵の強き國は富まず、富國強兵それ或は實際に於て矛盾せざるか、絶えず名譽の背進を能くして、ぞろぐと一萬二萬の團結捕虜を見るは常に文明の富を誇れる國兵なり、戦へば必ず突貫的に連戦

連勝を保證さるゝもの、寧ろ却ツて富まざる國の兵にあるべし、願はくは天この我國に二物を與へよ、

○
讀書、著述、耕作、漁業、適意の時々これを取るに任せて適意の隨處これを行ひ得ば、實に人生これ以上の快樂と幸福なかるべし、商工の利を追はむは既に遅く朝野いづれの政治家たるも亦その機を失せるもの、もし已むを得ずんば讀書と著述とを捨て、寧ろ耕作と漁業とに従事せむ哉、田に耕し海に漁るは書を讀み書を著すよりは遙に勝れり、由來一切の文字を抛棄して田父漁夫たるを得ば、始めに期せる人生の快事その半を失はずといふべし、

浪六全集

貳第拾編(終)

大正十五年九月十五日印刷
大正十五年九月二十日發行



不許
複製

放言錄
罵倒錄

定價金壹圓八拾錢

特價 金壹圓貳拾錢

村上信

著者

東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

著作權所有者 加島虎吉

東京市小石川區關口水道町四十六番地

印刷者 茶畑菊太郎

印刷所 長誠堂

發賣所

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
住吉町二番地
東京市本鄉區
本富士町二番地

電話一六手一二三六番
振替口座東京一七四四番
電話浪花一四九〇番
振替口座東京一六三六番
電話小石川七五〇三番
振替口座東京一六九四番

至誠堂書店

至誠堂第一分店

至誠堂第二分店

記念の爲
特價提供

浪六全集

袖珍箱入美本・新式イソト組
定價各册一金一圓八錢
特價各册一金一圓二錢
(送料各十錢)

新裝

縮刷

浪六全集

大衆文藝の先覺者浪六
先生傑作揃い……
興味津々たる讀物

全四十五卷
完成

第一編	世當五人男	第九編	民家處世人間學
第二編	五人男 黑田健次	第十編	八軒長屋
第三編	五人男 上田力	第十一編	八軒長屋(後)
第四編	五人男 倉橋幸藏	第十二編	八軒長屋(續)
第五編	五人男 川上三吉	第十三編	仍如件
第六編	當世五人男 吉田雄藏 花車・しなさだめ	第十四編	世當三人兄弟
第七編	金剛盤	第十五編	元祿名物男
第八編	岡崎俊平	第十六編	毒婦
第十七編	男女の戰	第二十四編	稻田一作
第十八編	鬼あざみ 高倉長右工門	第二十五編	稻田一作(續) 煩悶病院
第十九編	原田甲斐	第二十六編	罵倒錄 放言錄
第二十編	無遠慮	第二十七編	天眼通(前)
第二十一編	元祿十年女 明治十年女	第二十八編	天眼通(後)
第二十二編	當世女	第二十九編	川德
第二十三編	豊太閣	第三十編	牛肉一斤

浪 六 全 集

組 ト イ ボ 式 新 ・ 本 美 入 箱 珍 袖
 錢 十 八 圓 一 金 冊 各 價 定
 錢 十 二 圓 一 金 冊 各 價 特
 (錢 十 各 料 送)

第三十一編	裸體の人間	第三十九編	裏と表
第三十二編	無名の英雄と 失敗の英雄	第四十編	裏と表(續)
第三十三編	出放題	第四十一編	蔦の細道 八重の潮路
第三十四編	夜叉男	第四十二編	浮世車
第三十五編	うきよ草紙	第四十三編	うき舟
第三十六編	武士道	第四十四編	元祿四十七士
第三十七編	武者氣質	第四十五編	大正五人男
第三十八編	十文賊		

550

571

終

